

『源氏物語』の注釈書・現代語訳・梗概書一覧

—— 明治期から昭和前期まで ——

陣野英則

Abstract

はじめに

本稿は、明治期から昭和前期までの間に刊行された『源氏物語』の注釈書、現代日本語への訳書（以下、「現代語訳」と呼ぶ）、そして梗概書の類いを能う限りひろい上げ、一覧として示す研究ノートである。これまでの一覧の類いでもっとも豊富な情報を収めているのは、阿部・岡・山岸「一九六一」に収載の「参考文献年表」であろう。ここでは、論文・批評などもふくめ、丁寧な探索にもとづいたデータが整理されている。また、同書の「翻刻研究文献解説」と「研究書誌」では、個別に解説文が付されていて有益だが、それらにおける対象は代表的な文献に限られている。大半の注釈書に関しては、たとえばどの程度の分量の注が付されているのか、いかなる特徴があるのかといったようなことが何ら把握しえないのであった。また、現代語訳・梗概書などに関しても、抄出の様態、注記の有無などといった特徴をとらえることができない。本稿の末尾に示した「参考文献」には、それ以外の一覧、年譜の類いも挙げているが、いずれも同様の限界がある。

他方において、近代の『源氏物語』受容に関しては、與謝野晶子、谷崎潤一郎による現代語訳をはじめとして、多くの研究が積みかさねられているともいえるが、あくまでも著名な対象に限られる。それは当然のことともいえるが、『源氏物語』の注釈書・現代語訳・梗概書がきわめてたくさん刊行されているながら（あるいはそれゆえに）、一部の著名な書籍以外については、専門家でも中身をほとんど把握していないという現状がある。

筆者は、二〇二一年十二月、全国大学国語国文学会第一二四回大会のシンポジウム「なぜ時代は古典を必要としたのか——注釈の方法とその意義——」の登壇者の一人として、『源氏物語』が近代以降においていかに読まれ、解釈され、また利用されてきたのかということについて報告した。その内容は、既に同学会の機関誌『文学・語学』第二三六号に掲載の論文にまともていている（陣野「二〇二二」）。しかし、紙幅の制限があり、シンポジウムの折に用意した資料の大半は、論文内に組みこめなかつた。本稿は、その資料の部分を礎稿とし、明治期から昭和前期までの注釈書・現代語訳・梗概書の類いを一望のうちに収めるだけでなく、個々の書籍のおおまかな内実がとらえられるよう工夫してみたものである。なお、範囲を昭和前期（昭和二十年八月）までとしたのは、昭和後期以降の書籍の点数があまりに膨大であることがおもな理由である（いずれ機会をみて対応したいと考える）。

実は、注釈書と現代語訳、注釈書と梗概書、現代語訳と梗概書は、それぞれに共通する性格を有する場合がある。特に現代語訳と梗概書の間に境界を設けることはほぼ無理と判断し、一節の「注釈書」と二節の「現代語訳・梗概書」という二つに分けることとした。

なお、こうした一覧からみえてくる諸問題については、陣野「二〇二二」において既にある程度論じたものの、十分に検討しきれていない課題もある。しかし、本稿では紙幅の都合上、研究ノートとして一覧を提示するにとどめる。

一 明治期から昭和前期の注釈書の一覧

- まずは注釈書について、以下の(一)～(七)の要領にしたがい、一覧として示す。
- (一) 刊行された順に計五十二点を示し、①～⑤②の番号を付す。当該書が二冊以上にわたる場合は、第一冊目の刊行時を基準とする。
 - (二) 雑誌に掲載された注釈(講義にもとづくものをふくむ)はとりあげない。あくまでも書籍として刊行されたものの一覧とする。書名の表記については、基本的に旧字・異体字の類いを新字に統一している(ただし、人名についてはその限りではない)。
 - (三) 明治期の古典叢書の類いでは、注記が皆無というべきものもある。つまり、厳密な意味での注釈書とはいいがたいが、この一覧ではそれらをふくめることとする。
 - (四) 当該の注釈書がいつ刊行されたのか、そしていかなる性質をもつのかということが一見して把握できるよう、注釈書名の上に、刊行年(明治・大正・昭和の何年か)を示し、次に性質をあらわす記号を適宜付す。個々の記号の意味は次のとおりである。
 - △ 注釈が(ほぼ)ない。 ○ 簡略な注釈がある。
 - ◎ 詳細な注釈がある。 ■ 訳文がある。
 - ◆ (解説以外の)評・講述などがある。
 - ♠ 江戸時代までの注釈書の活字版(あるいは翻刻)に相当する。
 - (五) *印以下では、当該の注釈書の内容について簡略に説明する。特に、五十四帖全文を有するか、そうでない場合はどの巻までか、また抜粋の場合はいかなる様態かなどを簡潔に示す。なお、『源氏物語』の巻名を示す際、(一)内に適宜アラビア数字で何番目の巻かを示す。
 - (六) ※印以下では、当該の注釈書の著者・校注者などに関する簡略な情報を記す。ただし、確かな情報を得られない人物については「未詳」とする。

(七) 注釈書ではないが、『源氏物語』本文に関する最重要の文献については、参考までに「」で括った上で、ゴチック体にて示す(二点のみ)。

明治

- ① 17年 ◎ ◆ 『源氏物語講義』 十一冊 鈴木弘恭(講義)・黒川真頼(校閲)
柳河中外堂(～21年)
- * 「賢木」以下まで。かなり詳細な注釈が付されている。そこには、萩原広道『源氏物語評釈』からのつよい影響がみられる。
- ※ 鈴木弘恭(一八四四―九七)は元水戸藩士の国文学者。黒川真頼(まより)に師事。黒川真頼(二八二九―一九〇六)は国学者、歌人。帝国大学教授。
- ② 21年 ◎ ◆ 『女学校用読本 源氏物語拔萃』 一帙五冊 鈴木弘恭 柳河中外堂
- * 前掲①の『源氏物語講義』をもとに、「桐壺」「夕顔」「末摘花」「紅葉賀」「花宴」の五巻から抜粋し、女学校用教材に編纂。※ 鈴木弘恭は前掲①を参照。
- ③ 23年 ♠ ◆ 『校正補註国文全書 源氏物語湖月抄』 八冊 小田清雄(校補) 国文館(～24年)
- * 北村季吟『湖月抄』の活字版。五四帖全文。本居宣長『玉の小櫛』、萩原広道『源氏物語評釈』の注記を適宜加えている。
- ※ 小田清雄(すがお)は国学者、神官。平田派。
- ④ 23年 ♠ ◆ 『訂正増註 源氏物語湖月抄』 八冊 猪熊夏樹(増註訂正) 図書出版会社(～24年)
- * 北村季吟『湖月抄』の活字版。五四帖全文。本居宣長『玉の小櫛』を適宜加えている。
- ※ 猪熊夏樹(ひとくま)は国学者、神官で京都第一高等女学校教諭。
- ⑤ 23年 ○ 『日本文学全書 源氏物語』 五冊 落合直文・小中村義象・萩野由之(校) 博文館(～24年)

※五四帖全文。頭注は少なめ。特に「宇治十帖」ではかなり少ない。

※落合直文（一八六一一九〇三）は国文学者、歌人。小中村義象（一八六一一九三三）は国文学者、歌人。「池邊」姓から小中村清矩の養子となって「小中村」姓を名乗るが、のちに復姓。第一高等学校教授などを務めた。萩野由之（一八六〇一九〇四）は国文学者、歴史学者で東京帝国大学教授。

⑥34年 ○『源氏読本』四冊 大和田建樹（校訂） 上原書店（35年）

※「桐壺」「帚木」（ただし雨夜の品定めまで）「夕顔」「若紫」の四巻。

扉に「跡見女学校蔵版」とあり。頭注と巻末注があるが少なめ。※大和田建樹（一八五七一九一〇）は東京高等師範学校教授。のち退職して創作・作詞など中心に活動。

⑦36年 ○◆『源氏物語選釈』長連恒 早稲田大学出版部

※講義録。「賢木」（11）までの梗概と有名場面の抜粋。

※長連恒（一八七三?）は国文学者で東洋大学教授。

⑧36年 △『国文大観 物語部 源氏物語』二冊 丸岡桂・松下大三郎（校訂）板倉屋書房

※五四帖全文。注も解説も皆無。

※丸岡桂（一八七八一九一九）は歌人、能楽研究者。松下大三郎（一八七八一九三五）は国文学者で國學院大學教授。

⑨39年 ○『紫文摘英』上巻 本居豊顕 日高有倫堂

※抄本。「桐壺」「帚木」「夕顔」「若紫」「末摘花」「紅葉賀」「葵」「賢木」「須磨」「明石」「落標」「蓬生」「閑屋」「絵合」「松風」「薄雲」「朝顔」「乙女」の各巻から名場面を抜粋。なお、下巻の存在は確認できず。

※本居豊顕（一八三四一九一三）は本居内遠の子で、宣長の養子となった本居大平の孫。東京帝国大学などに出講。大正天皇の東宮時代の侍講。

⑩41年 ♠『国文註釈全書 第三巻』室松岩雄（編） 國學院大學出版部

※四辻善成『河海抄』、一条兼良『花鳥余情』、安藤為章『紫女七論』

の翻刻。

※室松岩雄（生没年未詳）は皇學書院の取締役。『国文註釈全書』シリーズの校訂編輯にあたる。

⑪42年 △『国民文庫 源氏物語』二冊 本居豊顕・古谷知新（校訂） 国民文庫刊行会

※五四帖全文。注も解説も皆無。総ルビ。発話者・歌の詠者を明示。

※本居豊顕は前掲⑨を参照。古谷知新（生没年未詳）は独逸学協会学校教諭、國學院大學講師を務めた。

⑫42年 ♠『国文註釈全書 第十二巻』室松岩雄（編） 國學院大學出版部

※萩原広道『源氏物語評釈』（花宴）（8）までの活字版。および語釈・余釈を載せる。なお、大正2年には、皇學書院より「訂正再版」（紫女七論）併載）を刊行。

※室松岩雄は前掲⑩を参照。

⑬44年 ◎◆『新釈源氏物語』二冊 藤井紫影・佐々醒雪・笹川臨風・沼波瓊音 新潮社（大正3年）

※「落標」（14）まで。語釈・現代語訳・評が揃う画期的注釈書。ローリー「二〇〇四」、ローリー「二〇〇七」、河添「二〇一八」、陣野「二〇二二」などを参照。

※四名とも俳人で、俳句結社「筑波会」に所属。藤井紫影（おとせ）（一八六八一九四五）は国文学者で京都帝国大学教授。佐々醒雪（一八七二一九一七）は国文学者で東京高等師範学校教授。笹川臨風（一八七〇一九四九）は歴史家、美術史家で明治大学教授、のち東洋大学教授。沼波瓊音（一八七七一九二七）は国文学者で第一高等学校教授。なお、巻ごとに分担しているが、藤井紫影の担当した巻はない。

大正

⑭元年 ○『校註国文叢書 源氏物語』二冊 池邊義象（編） 本居豊顕（校訂註解） 博文館

※五四帖全文。頭注の説明は簡略ながらも、注の数そのものは多い。

上巻の冒頭に北村久備「すみれ草」、下巻の末尾に近藤芳樹「源語奥旨」と安藤為章「紫家七論」を掲載。

※池邊義象は前掲⑤の小中村義象を参照。本居豊穎は前掲⑨を参照。

⑮3年 ○『有朋堂文庫 源氏物語』四冊 武笠三 有朋堂書店

*五四帖全文。頭注の個々の説明はきわめて簡略ながら、その数は多め。

※武笠三(一八七二―一九二九)は国文学者で、第四高等学校、第七高等学校校造士館などに勤務。

⑮5年 ○◆『校定源氏物語詳解』一帙(五冊) 池邊義象・鎌田正憲 博文館

*「花宴」(8)まで。同じ版元の『校註国文叢書』(前掲⑭)の執筆を進める過程でまとめられた。詳細を極める注釈書であり、「詳解」の名にふさわしい画期的な注釈書。陣野「二〇二二」で少し具体的に紹介している。

※池邊義象は前掲⑤の小中村義象を参照。鎌田正憲(一八八六―?)は国文学者で宮内省諸陵寮考証官を務めた。

⑮7年 ○◆『源氏物語選釈』永井一孝 早稲田大学出版社

*講義録。「兩夜の品定(帚木)」「夕顔」「若紫」から抜粋。

※永井一孝(一八六八―一九五八)は国文学者で早稲田大学高等師範部教授。

⑮7年 ○『校註日本文学叢書 源氏物語』三冊 物集高量(校注) 広文庫刊行会

*五四帖全文。頭注は簡潔ながら数は多め。

※物集高量(一八七九―一九八五)は国文学者、著述家。父物集高見(一八四七―一九二八)による類書「広文庫」全二十巻の編纂事業に協力。

⑮10年 △『源氏物語』三冊 島津久基 中興館

*抄本。高等学校の教科書用。計二帖。省略した巻、および中略箇所は簡単な説明で補う。頭注形式ながら、注は極めて少ない。

※島津久基(一八九二―一九四九)は国文学者。東京帝国大学助教授で

あつたが一九二六年に病で退職、その後、東洋大学教授、東京帝国大学教授。

⑳11年 ○『新釈日本文学叢書 源氏物語』三冊 物集高量(編著) 日本文学叢書刊行会

*五四帖全文。物集当人による『校註日本文学叢書』(前掲⑮)と同じ内容。

※物集高量は前掲⑮を参照。

㉑12年 ○◆『頭註対訳 源氏物語』六冊 宮田和一郎 文献書院(昭和3年)

*五冊目の「明石」(13)まで、および六冊目の「宇治十帖上」が「橋姫」(45)から「総角」(47)まで。なお、「桐壺」に次ぐ二番目の刊行は「須磨」「明石」で、その後「帚木」以下に戻って刊行された。三段組で、上段に注記、中段に本文、下段に現代語訳を組む。現代語訳にもっともスペースを割いている一方、上段の注記はかなり少ない。

※宮田和一郎(一八九〇―一九八九)は国文学者で、大阪高等学校(旧制)教授、大阪工業大学教授、池坊短期大学教授などを務めた。

㉒13年 △『抄本源氏物語』二冊 吉澤義則・島田退蔵 文献書院(14年)

*抄本。高等学校などの教科書用。「上巻」は「明石」までの中から九帖、「下巻」は「宇治十帖」後半、「東屋」以降の四帖。省略した巻、および中略箇所は簡単な説明で補う。頭注形式ながら、注はかなり乏しい。

※吉澤義則(一八七六―一九五四)は国文学者、国語学者で京都帝国大学教授。島田退蔵(一八八九―一九七〇)は国文学者で第三高等学校教授。また、同校の最後の校長となった。

㉓13年 ○『源氏物語活釈』二冊 小林栄子 大同館(14年)

*五四帖全文。前篇が八八一頁、後篇が六七四頁の大冊。本文では、漢字をかなり多めに宛てている。後篇には、附録「紫式部日記抄」を掲載する。

※小林栄子〔田中夕風、本名 田中栄子〕(一八七二―一九五二)は落

合直文、萩野由之に国文学などを師事した。また、尾崎紅葉門下の小説家。

⑭14年 ◎『定本源氏物語新解』三冊 金子元臣 明治書院（昭和5年）

***五四帖全文**。本文の文字が大きく、頭注はある程度詳しい。三冊目の巻末には「手枕」「山路の露」を掲載する。三冊で二、二八〇頁を超える。

※金子元臣（一八六九―一九四四）は、国文学者、歌人。國學院大學および慶應義塾大学の教授。

⑮15年 ○『校注日本文学大系 源氏物語』二冊 沼波守 国民図書（昭和2年）

***五四帖全文**。上巻のはじめに北村湖春の梗概書「源氏物語忍草」、下巻の末尾に北村久備の「すみれ草」を掲載する。上巻が九三〇頁、下巻が一、〇九〇頁に及ぶ。

※沼波守（生没年未詳）は中央大学教授。

⑯15年 ♠『源氏物語湖月抄』七冊 吉澤義則（監修）・宮田和一郎（校合）文献書院

*北村季吟『湖月抄』の活字版。『湖月抄』よりも後の注釈は加えていない。

※吉澤義則は前掲⑫を、宮田和一郎は前掲⑬をそれぞれ参照。

⑰15年 △『源氏物語講本』佐藤仁之助（編）敬文堂書店

*抄本。計二〇帖ほど。細かな見出しで段落を分けている。注記は皆無。高等専門諸学校の国語講読用。

※佐藤仁之助（一八六九―一九三九）は東京開成中学校講師、早稲田高等学院教授、大東文化学院教授などを務めた。

⑱15年 ○『文検受驗用 源氏物語新釈』龍澤良芳 大同館書店

*「桐壺」から「明石」(13)までは原文と語釈・通釈。「落標」以降は梗概のみ。計八七六頁。文部省師範学校中学校高等女学校教員検定試験対策用。

※龍澤良芳（一八九八―？）は東京府立第七中学校などを経て、戦後

は都内の中学校校長となる。

⑲15年 △『日本古典全集 源氏物語』五冊 與謝野寛・正宗敦夫・與謝野

晶子（編纂校訂） 日本古典全集刊行会（昭和3年）

***五四帖全文**。注釈は皆無。

※與謝野寛（鐵幹）（一八七三―一九三五）は詩人、歌人。正宗敦夫（一八八一―一九五八）は国文学者、歌人でノートルダム清心女子大学教授。與謝野晶子（一八七八―一九四二）は歌人、作家、思想家。

昭和前期

⑳2年 ○『校註 源氏物語』二冊 梅澤和軒 有宏社（昭和5年）

*「若菜下」(35)まで。扉の標題は「校註 源氏ものかたり」。現代的な注釈が目指されている。挿絵が多い。

※梅澤和軒（一八七一―一九三二）は国文学者、美術評論家。

㉑2年 ♠『増註 源氏物語湖月抄』三冊 猪熊夏樹（補註）・有川武彦（校訂）湯川弘文社（昭和3年）

*今日の講談社学術文庫版にまで受け継がれる、『湖月抄』の活字版。**五四帖全文**。

※猪熊夏樹は前掲④を参照。有川武彦（一八八五―一九三九）は国文学者で龍谷大学教授。

㉒2年 ♠『源氏物語諸抄大成』二冊 永井一孝（編）斯文書院（昭和4年）

*「朝顔」(20)まで。書名には示されていないが、実質は『湖月抄』の「増註」版であって、前掲⑳の有川武彦による校訂版とかなり近いが、増註部分に違いがある。各巻の冒頭に詳しい「梗概」をおいている点が独自。

※永井一孝は前掲⑰を参照。

㉓2年 ○『源氏物語 宇治十帖新釈』石川誠 大同館書店

*「宇治十帖」の抄本。初めの「橋姫」(45)と「榎本」(46)では、本文に詳細な「語釈」「口訳」を付す。「総角」(47)以下の八帖は、「残篇選釈」と「附録 残篇梗概」のみ。

※石川誠（生没年未詳）は秋田県立花輪高等女学校校長を務めた。

③3年 ○『源氏物語精粹』沼澤龍雄 研精堂

*抄本。「桐壺」～「夢浮橋」のうち主要箇所をとりあげる。七五〇頁を超えるが、そのうち二〇〇頁以上が「附録」。各種の図表、さらに本居宣長、藤岡作太郎、五十嵐力などの論考を掲載する。また、アーサー・ウェイリーによる英訳の一部も載せる。

※沼澤龍雄（一八七九～）は国文学者で駒澤大学教授。

③5年 △『岩波文庫 源氏物語』五冊 島津久基（校訂） 岩波書店（～9年）

*五四帖全文。注釈は皆無。会話文と和歌の主体とを小文字で示す。

※島津久基は前掲⑱を参照。

③6年 ○『博文館叢書 源氏物語』三冊 藤村作・笹川種郎・尾上八郎（編） 博文館

*五四帖全文。注は少なめ。

※藤村作（一八七五～一九五三）は国文学者で東京帝国大学教授。笹川種郎は、笹川臨風のこと（前掲⑳を参照）。尾上八郎（柴舟）（一八七六～一九五七）は歌人、書家、国文学者。東京女子高等師範学校教授などを務めた。

③7年 ♠『集註 源氏物語新考』二冊 永井一孝 国民図書（～5年）

*前掲⑳の『源氏物語諸抄大成』二冊（昭和2～4年）と同内容。よって「朝顔」（20）まで。

※永井一孝は前掲⑰を参照。

③8年 ○◆『対訳 源氏物語講話』六冊 島津久基 中興館・矢島書店（～25年）

*「賢木」（10）まで。「口訳」「語義」に加え、詳細な考証と評を展開する「釈評」がとりわけ優れる。

※島津久基は前掲⑱を参照。

③9年 ○◆『新講源氏物語』十二冊 石田元季・小室由三・岡田稔・山崎敏夫・石井直三郎・西村雄一 正文館（石田「桐壺」、西村「浮舟」）

*「桐壺」「帚木」「夕顔」「若紫」「葵」「須磨」「明石」「少女」「玉鬘」「真木柱」「橋姫」「浮舟」の十二巻を一冊ずつ刊行する企画

だが、「桐壺」（昭和10）と「浮舟」（昭和7）しか確認ができない。「通釈」と詳しい「語釈」が中心。

※石田元季（一八七七一～一九四三）は国文学者で愛知医科大学教授、第八高等学校講師。西村雄一（生没年未詳）は愛知県知多高等学校校長を務めた。

④0年 ○『校註 源氏物語（一）』金子元臣 明治書院

*「明石」（12）まで。本文は、同じ金子元臣の前掲⑳、『定本源氏物語新解』（大正14～昭和5年）による。頭注は簡略。なお、扉の書名においては「一」が記されていない。また、続刊は確認できず。

※金子元臣は前掲㉑を参照。

④1年 ○◆『増訂 対訳源氏物語』八冊 宮田和一郎 日本文学社（～9年）

*同じ宮田和一郎の前掲㉒、『頭註対訳源氏物語』（大正12～昭和3年）と同じく、「桐壺」～「明石」まで、および「橋姫」～「総角」まで。

※宮田和一郎は前掲㉑を参照。

④2年 ○『要註 源氏物語』島津久基 中興館

*「明石」（12）まで（ただし「空蟬」を除く）の抄出。注は各頁の左側におかれていて、少なめ。

※島津久基は前掲⑱を参照。

④3年 ○◆『源氏物語講義』二冊 徳本正俊 芳文堂

*「明石」（12）まで。頭注は少なめだが、「釈」（通釈）に加え「補」（補注）と「評」が充実。二冊のいずれも七〇〇頁を超える大冊。

※徳本正俊（一八九六～一九六二）は東京府立第三中学校に永年勤務。

④4年 ○◆『口訳対照 源氏物語』竹野長次（編）三省堂

*「末摘花」（6）まで。三段組みで、上段に小さな文字の現代語訳、下段の注は少なめ。

※竹野長次（一八八九～一九六二）は国文学者で早稲田大学教授。

④5年 ○◆『新撰 源氏物語詳解 桐壺・帚木』澤田總清・龍澤良芳 健文

社

*「帚木」(2)まで。語釈はかなり詳細。現代語訳は上段に小さな文字で組まれる。

※澤田總清(一八九二―一九四六)は東京府立第一中学校教諭。龍澤良芳は前掲⑳を参照。

〔10年〕尾州家河内本 源氏物語開題 尾張徳川黎明会(著) 尾張徳川黎明会

④6 11年 ♠『未刊国文古註釈大系 第十一冊』吉澤義則(編) 帝国教育会出版部

*世尊寺伊行『源氏釈』などの翻刻。

※吉澤義則は前掲㉒を参照。

④7 11年 ◎◆『香雪叢書第七卷 源氏物語講義』下田歌子 実践女学校出版部

*「空蟬」(3)まで。語釈と評のいずれも詳細。

※下田歌子(一八五四―一九三六)は女子教育者、歌人。実践女子学園の創立者。

④8 12年 ○■『源氏物語総釈』六冊 島津久基^ほ 計十八名 楽浪書院(一四年)

*五四帖全文。上段に現代語訳、下段に原文、各巻末に注釈。分担

は概説 〓 島津、「桐壺」 〓 「空蟬」 〓 沼澤龍雄、「夕顔」 〓 「若紫」

〓 亀田純一郎、「末摘花」 〓 「葵」 〓 平林治徳、「賢木」 〓 「花散里」

〓 尾上八郎、「須磨」 〓 「蓬生」 〓 石村貞吉、「閑屋」 〓 「朝顔」

〓 風巻景次郎、「少女」 〓 「初音」 〓 福井久蔵、「胡蝶」 〓 「行幸」

〓 佐伯梅友、「藤袴」 〓 「藤裏葉」 〓 松尾聰、「若菜上」 〓 加藤順

三、「若菜下」 〓 柏木 〓 島田退蔵、「横笛」 〓 鈴虫 〓 加藤、「夕霧

〓 「雲隠」 〓 窪田敏夫、「匂兵部卿」 〓 「竹河」 〓 志田延義、「橋

姫」 〓 「榎本」 〓 久松潜一、「総角」 〓 「早蕨」 〓 藤田徳太郎、「宿木」

〓 「蜻蛉」 〓 篠田太郎、「手習」 〓 「夢浮橋」 〓 山岸徳平

※島津久基は前掲⑳を参照。他については略す。

④9 12年 ○『対校 源氏物語新釈』六冊 吉澤義則 平凡社(一五年)

*五四帖全文。『湖月抄』本文を底本とし、尾州家河内本を以て対校。

※吉澤義則は前掲㉒を参照。

⑤0 12年 ♠『未刊国文古註釈大系 第十冊』吉澤義則(編) 帝国教育会出版部

*「異本紫明抄」(『光源氏物語抄』)、および素寂『紫明抄』の翻刻。

※吉澤義則は前掲㉒を参照。

⑤1 13年 ○■『増訂 対訳源氏物語』三冊 宮田和一郎 有光社

*大正12年(昭和3年)の㉑、また昭和7(9年)の㉒(日本文学社版)と同じ内容。上・中巻は「桐壺」 〓 「明石」(13)まで、下巻は「宇

治十帖」の「橋姫」(45) 〓 「総角」(47)のみ。

※宮田和一郎は前掲㉑を参照。

〔17年〕校異源氏物語 四冊 芳賀博士記念会(編著) 中央公論社

⑤2 19年 ◎『註釈源氏物語』麻生磯次 至文堂

*「花宴」(8)まで。注釈はかなり多くて丁寧。かつは本文の傍らに適宜現代語訳を示す。

※麻生磯次(一八九六―一九七九)は国文学者で東京大学教授。のち学習院長。

二 明治期から昭和前期の現代語訳と梗概書

次いで現代語訳と梗概書について、以下の(一) 〓 (五)の要領にしたがい、一覧として示す。

(一) 刊行された順に計二十四点を示し、① 〓 ⑧の符号を付す。なお、当該書が二冊以上にわたる場合は、第一冊目の刊行時を基準とする。

(二) 雑誌に掲載された現代語訳・梗概書はとりあげない。あくまでも書籍として刊行されたものの一覧とする。書名の表記については、基本的に旧字・異体字の類いを新字に統一している(ただし、人名についてはその限りではない)。

(三) 当該の現代語訳・梗概書がいつ刊行されたのか、そしていかなる性質をもつのかということが一見して把握できるよう、個々の書名の上に、刊行

年(明治・大正・昭和の何年か)を示し、次に性質をあらわす記号を適宜付す。個々の記号の意味は次のとおりである。

☆Ⅱ口語体への訳書 ★Ⅱ口語体以外への訳書

▼梗概書 ○Ⅱ簡略な注釈有

なお、本稿の「はじめに」にも記したとおり、現代語訳と梗概書の線引きは特に困難であり、たとえば現代日本語の訳書のようにでありながら、梗概書ともいえるような書籍が多く刊行されている。そうした例については、「☆(▼)」のように記す。

(四) *印以下では、当該書の内容について簡略に説明する。なお、『源氏物語』の巻名を示す際、(一)内に適宜アラビア数字で何番目の巻かを示す。

(五) ※印以下では、当該書の訳者・著者などに関する簡略な情報を記す。ただし、確かな情報を得られない人物については「未詳」とする。

なお、注釈書でも少しみられたが、同内容の本が書名をかえたり版元をかえたりしながら再刊される事例が現代語訳・梗概書では特に多い。まったく同内容と見なした場合は基本的に立項しないという方針をとったが、微妙な例が少なくないことにも言及しておく。

明治

(a) 18年 ★『訳準綺語』(この年に稿本成立か) 菊池三溪

*漢訳。「帚木」「空蟬」「若紫」の一部のみ。「空蟬」「若紫」は菊

池三溪没後の26年に雑誌『此花草紙』に掲載。また「若紫」は明

治44年刊行の『訳準綺語』(尚史堂)に収載。

※菊池三溪(一八一九—一八九二)は漢学者。幕府の奥儒者を務めた。

維新後は警視庁御用掛を務めるも、やがて下野した。

(b) 21年 ★○『新編紫史』(二名通俗源氏物語通) 十冊 増田于信 誠之堂書

店(〜37年)

*全篇を文語体の通俗語に訳す。

※増田于信(一八六二—一九三二?)は国文学者。宮内省御用掛などを

務めた。

(c) 26年 ★『紫史 卷三』川合次郎 仁里庵

*漢訳。「空蟬」(3)のみ確認可能。

※川合次郎は未詳。伯耆国出身か。

(d) 39年 ▼『家庭新詩 源氏物語』溝口白羊 岡村書店・福岡書店

*七五調の文語詩により「朝顔」(20)までの物語内容を示す。

※溝口白羊(一八八一—一九四五)は詩人、小説家。

(e) 39年 ▼『源氏物語梗概』長連恒 新潮社

*全篇の梗概を文語文で記す。

※長連恒は本稿一節、前掲⑦を参照。

(f) 44年 ▼○『源氏物語大意』尾上登良子 大同館

*文語文による全篇の梗概。頭注を活かし、原文の調子をのこす。

「附録」として「山路の露」「雲隠六帖」をも収載する。五五五頁

におよぶ大著。

※尾上登良子(一八七六—一九五七)は尾上八郎(二節の前掲⑧)の妻。

(g) 45年 ☆(▼)『新訳源氏物語』四冊 與謝野晶子 金尾文淵堂(〜大正2年)

*全篇を口語体に訳す。ただし、上巻の巻々などは抄訳。なお、大

正3年に縮刷の四冊版が金尾文淵堂より刊行される。また、その

後も出版社をかえてたびたび出版される。

※與謝野晶子は本稿一節、前掲⑨を参照。

大正

(h) 3年 ▼『アカギ叢書 源氏物語』二冊 小山龍之輔 赤城正蔵

*全篇をコンパクトにまとめる。ただし、後半、特に「宇治十帖」

など簡略化の度が強い。なお、赤城正蔵のアカギ叢書は、文庫本

の先駆けとなった。

※小山龍之輔(二八八一—一九六三)は日本大学、法政大学の教授。

(i) 3年 ▼『新訳国文叢書 第七編 源氏物語 上巻』坪内孝(編) 文洋社書

店

*「須磨」(12)までの梗概。三冊本の予定であったか。中・下巻

は確認できず。

※坪内孝(生没年未詳)は京城高等女学校校長を務めた。

④4年 ▼『世界名著物語 第十二編 源氏物語』窪田空穂 実業之日本社
*全篇の梗概。「四十一幻」までについては各巻ごとに分けて記されるが、最後は、「四十二雲隠より夢浮橋まで」(十七頁分)として一括される。

※窪田空穂〔本名 通治〕(一八七七一—一九六七)は歌人、国文学者。雑誌記者、編集者などを経て、のち早稲田大学教授。

⑦7年 ☆(▼)『源氏物語語情話』吉井勇 新潮社

*抄訳本といえるが、梗概書の性格も有するというべきか。装幀は竹久夢二。なお、同じ内容の補訂版が、昭和27年に『源氏物語 現代語縮訳版』として、また平成23年には『吉井勇訳 源氏物語』として刊行されている。

※吉井勇(一八八六一—一九六〇)は歌人、劇作家、作家。

⑩11年 ▼『世界名著梗概叢書 源氏物語』三冊 文献書院編集部代表者太宰衛門 文献書院(〜12年)

*全巻の梗概をコンパクトにまとめる。なお、未見ながら同じく「太宰衛門」の名で、三星社(大正13年)、有宏社(大正15年)、松栄館出版部(昭和3年)、さらに文開堂(昭和4年)より、『新訳 源氏物語』としてまったく同じ内容の梗概書が刊行されている模様である。また、櫻園書院編輯部の著作として櫻園書院から昭和5年に刊行された『新訳 源氏物語』は、その内容を確認したところ、三冊が一冊になってはいるものの、この⑩と中身はまったく同一と認められる(この一覧では立項しなかった)。また、次に掲げる⑭島田退蔵『縮訳 源氏ものがたり』も、中身はほとんど同一といえる。

※太宰衛門は未詳。文献書院編輯部の一員か。また、この⑩の実質的な著作者は島田退蔵か(次に掲げる⑭を参照)。

⑭12年 ▼『縮訳 源氏ものがたり』島田退蔵 文献書院

*大正11年の⑩『世界名著梗概叢書』三冊本の内容をほとんどその

まま流用。ただし、わずかに文言の補訂もみられる。なお、冒頭に吉澤義則の「序」、つづいて年表・系図を加えている。

※島田退蔵は本稿一節、前掲⑫を参照。

⑮13年 ☆○『全訳王朝文学叢書 源氏物語』六冊 吉澤義則^ほ 計十名程度

(巻により若干異なる) 王朝文学叢書刊行会(文献書院内)(〜昭和2年)

*全訳に簡略な頭注を付す。六分冊の刊行順は、五↓六↓一↓三↓四↓二と変則的であって、「宇治十帖」が先に刊行された。吉澤以外の「訳者」は、加藤順三・春日政治・吉川理吉・能勢朝次・有川武彦・木枝増一・宮田和一郎・島田退蔵・鈴鹿三七(二冊目)。担当箇所は明示されていない。

※吉澤義則は本稿一節、前掲⑫を参照。

⑯15年 ☆(▼)『全訳 源氏物語 上巻』鈴木正彦 第百書房

*「夕霧」(39)の途中までの訳書。末尾に「(以下下巻)」と記しているが、下巻は刊行されていない模様。計四〇三頁。

※鈴木正彦は未詳。なお、「訳者序言」では、第百書房を経営する高島政衛の友人であることに言及している。

昭和前期

⑰2年 ☆(▼)『全訳 源氏物語』鈴木正彦 内外出版協会

*「蜻蛉」(52)の途中までの訳書。未完であるが、末尾には「(完)」と記す。「夕霧」巻の途中までは、大正15年の⑯『全訳 源氏物語』をそのまま取り込む。計七〇二頁。のち昭和6年には、山口愛川『新訳 源氏物語』(カオリ社)として同内容のものが刊行される。

※鈴木正彦は前掲⑯を参照。

⑱2年 ☆(▼)『万有文庫 源氏物語』二冊 和田萬吉(監修)・河原萬吉(翻

訳代表者) 万有文庫刊行会(上)・潮文閣(下)(〜3年)
*全訳というより、詳細な梗概書といふべきか。なお、巻ごとの見出しも区切りも何ら設けられていない。

※和田萬吉(一八六五—一九三四)は国文学者、書誌学者で東京帝国大学教授。河原萬吉(一八九六一—一九八二)は翻訳家、書誌学者。新光

社、のち万有文庫刊行会に勤務し、翻訳を手がける。一時期、北
京師範大学教授となる。

③ 3年 ☆○『逐語全訳 源氏物語』六冊 吉澤義則 文献書院

*全訳。大正13〜昭和2年の①『全訳王朝文学叢書』をそのまま流
用。しかし、奥付の「著作者」は吉澤一人となり、他の担当者名
が消えている。

※吉澤義則は本稿一節、前掲②を参照。

④ 4年 ☆『昭和口訳 源氏物語』和田萬吉（監修）・長柄忠子（訳） 玉文社

*全訳。九五〇頁を超える大冊。のち昭和6年には、同じ書名のま
ま精文堂書店から刊行される。

※和田萬吉は前掲④を参照。長柄忠子は未詳。短篇小説集『海の歌』
を昭和3年に出している。同書では、「序」に次いで「田山花袋
先生へ」という短い文章を載せている。

⑩ 10年 ☆(▼)『物語日本文学 源氏物語』二冊 藤村作（訳者代表） 至文
堂（〜11年）

*全巻の「精髓を要約」（例言）する訳書であり、梗概書に近い。「共
訳者」として、藤村を筆頭に、志田義秀・武田祐吉・島津久基・
久松潜一・池田亀鑑・能勢朝次・平林治徳の八名が並ぶ。

※藤村作は本稿一節、前掲③を参照。

⑪ 11年 ☆○『現代語訳国文学全集 源氏物語』三冊 窪田空穂・與謝野晶
子（訳） 非凡閣（〜13年）

*全訳。上・下巻が窪田空穂、中巻が與謝野晶子の担当。窪田空穂
担当の方では各巻末に注があり、作中和歌については原文だけで
なくその訳も載せている。一方、與謝野晶子担当の方では巻末の
注も作中和歌の訳もない。

※窪田空穂は前掲①を参照。與謝野晶子は本稿一節、前掲②を参照。

⑬ 13年 ☆『新々訳 源氏物語』六冊 與謝野晶子 金尾文淵堂（〜14年）

*全訳。特に戦後、さまざまな出版社からくりかえし刊行されてい
る。

※與謝野晶子は本稿一節、前掲②を参照。

⑭ 14年 ☆『潤一郎訳 源氏物語』二六冊 谷崎潤一郎 中央公論社（〜16年）

*全訳。戦後、一九五〇年代の新訳、一九六〇年代の新々訳がいず
れも同じ版元から刊行されている。またそれぞれに愛蔵版、普及
版なども出された。

※谷崎潤一郎（一八八六一一九六五）は明治末から活躍をつづけた小説
家。

⑮ 14年 ☆○『現代語訳 源氏物語』（改造文庫） 窪田空穂 改造社（〜18年）

*「柏木」（36）までの全訳。昭和11年刊行の『現代語訳国文学全
集 源氏物語』上巻と比較してみると、ほぼ同じ訳文ながら多少
の補訂がある。一方、巻末の注と作中和歌の訳は削られている。

※窪田空穂は前掲①を参照。

三 まとめ

近代における『源氏物語』の注釈書・現代語訳・梗概書などの展開につい
ては、以上の一覧から、次のような二つのおおまかな流れがとらえられるだ
ろう。すなわち、オリジナルの注釈書がほとんどつくられなかった明治期（そ
れは陣野「二〇二二」で述べたように文学史の時代ともいえる）から、注釈書の時代
（昭和12年ごろまで）、さらに論文・批評の時代（昭和10年代）への流れがあり、
もうひとつには、梗概本の時代（大正期）から現代語訳の時代（昭和前期）へ
の流れがある。

なお、近代以降の『萬葉集』注釈書の型式について、小松「二〇二二」で
は、「一九二〇年代（大正期から昭和初期）に、江戸和学の萬葉集注釈書にはな
い〈評釈〉を加えた〈本文・語釈・現代語訳・評釈〉という「形式」の注釈
書が登場する」と指摘されている。あわせて、〈評釈〉が「時代の思潮の影
響を受けやすい」という問題点も明らかにされている。これに対して『源氏
物語』の注釈書の場合は、長篇物語なるがゆえというべきか、注釈すら皆無
のものが昭和前期まで散見されること、また注記（語釈）はあつても評釈を
一切有しない本がかなり多いことなどが留意される。要は、『源氏物語』の

注釈書においては、今日に至るまできっちりとした「形式」が定まっていな
いともいえるだろう。

一方で、注釈書に載る現代語訳（通釈）と現代語の訳書、また抄出の注釈
書と梗概書的な縮訳（あるいは詳細な梗概書）のように、さまざまな重なりも
みられる。また、特に留意すべき画期的な注釈書のこと、さらにこの一覽に
示した書籍群と昭和前期の『源氏物語』に対する評価との関わりなどについ
ては、陣野「二〇二二」で論じているので、適宜参照されることを冀う。

参考文献

- 秋山 虔「一九八三」『大正期の源氏物語研究』『国文学 解釈と鑑賞』四八一〇
阿部秋生・岡一男・山岸徳平（編著）「一九六二」『国語国文学研究史大成4 源氏物
語下』三省堂
岡部明日香「二〇〇五」『源氏物語の漢訳受容をめぐって——明治時代を中心に——』
『教養としての古典——過去・現在・未来——第28回 国際日本文学研究会会談議録』
人間文化研究機構 国文学研究資料館
小川 陽子「二〇一七」『江戸から明治へ——継承と変革——』助川幸逸郎・立石和弘・
土方洋一・松岡智之（編）『新時代の源氏学10 メディア・文化の階級闘争』竹林舎
河添 房江「二〇一八」『源氏物語越境論——唐物表象と物語享受の諸相』岩波書店
神野藤昭夫「一九八三」『戦前の源氏物語研究』『国文学 解釈と鑑賞』四八一〇
神野藤昭夫「二〇二二」『よみがえる与謝野晶子の源氏物語』花鳥社
小松 靖彦「二〇二二」『近代的〈注釈〉とは何か』『文学・語学』二二二六、全国大学国
語国文学会
佐藤 由佳「二〇二〇」『源氏物語 現代語訳書誌集成』新泉社
重松 信弘「一九三七」『源氏物語研究史』刀工書院
陣野 英則「二〇二二」『近代「国文学」の肖像 第2巻 藤岡作太郎 「文明史」の構想』
岩波書店
陣野 英則「二〇二二」『明治期から昭和前期の『源氏物語』——注釈書・現代語訳・
梗概書——』『文学・語学』二二二六、全国大学国語国文学会
立石 和弘「二〇〇五」『源氏物語』の現代語訳 立石和弘・安藤徹（編）『源氏文化
の時空』Ⅱ第一章 森話社
立石 和弘「二〇一七」『源氏文化年譜——明治から二〇二二年まで——』助川幸逸郎・
立石和弘・土方洋一・松岡智之（編）『新時代の源氏学10 メディア・文化の階級闘
争』竹林舎
田淵旬美子「二〇二二」『近代「国文学」の肖像 第3巻 窪田空穂 「評釈」の可能性』
『源氏物語』の注釈書・現代語訳・梗概書一覽

岩波書店

藤田徳太郎「一九三二」『源氏物語研究書目要覧』六文館

前田 雅之「二〇一六」『国文学』の明治—二十三年—国文学・井上毅・前田雅

之・青山英正・上原麻有子（編）『幕末明治 移行期の思想と文化』勉誠出版

三谷 邦明「一九八三」『明治期の源氏物語研究』『国文学 解釈と鑑賞』四八一〇

ローリー、ゲイ「二〇〇四」『国家アイデンティティとカノン形成』『日本近代文学』

七一 日本近代文学会（保田祥・緑川真知子 訳）

ローリー、ゲイ「二〇〇七」『明治・大正の『源氏物語』——『新訳源氏物語』の誕生

をめぐって——』伊井春樹（監修）・千葉俊二（編）『講座 源氏物語研究 第六

巻 近代文学における源氏物語』おうふう

ウェブサイト『海外平安文学情報』（研究代表 伊藤鉄也）『現代語訳『源氏物語』年表』
(https://genjio.org/genji_information/modern_language_genji/)

【付記】「はじめに」に示した全国大学国語国文学会のシンポジウムを企画された渡邊

卓氏、登壇者の浅田徹・石川則夫・小松靖彦の各氏より多くの教示を得た。記し
て謝意を表す。

An Overview of Commentaries, Modern Translations, and Digests of *The Tale of Genji*: From the Meiji Period to the Beginning of the Shōwa Period

Hidenori JINNO

Abstract

These research notes present an overview of and, to the extent possible, highlight particular commentaries, modern-language translations, and digests of *The Tale of Genji* published from the Meiji period to the beginning of the Shōwa period. An overview like that has, of course, been created before now; however, an overview containing information as to how many annotations are appended or what kind of characteristics distinguishes each commentary, translation, or digest has never been produced. Furthermore, there is no resource that concisely verifies whether or not a modern-language translation or digest was published alongside the original text or with footnotes. Regarding the modern reception of *The Tale of Genji*, a number of prominent authors and poets assert that research on *Genji*'s modern translations is at its peak; however, this may not be the case when the current state of the field suggests that we cannot easily ascertain why most of the vast number of commentaries, modern-language translations, and digests concerning *The Tale of Genji* simply receive no attention, or even distinguish what type of books these are in the first place. The present research notes compile the main points of each text, including information about the verified contents, qualities and distinctive characteristics, and annotator/translator, while also summarizing the texts in a consolidated review.